



没後20年
記念企画

藤後左右展

ふたごの愛と俳人

平成二十四年度 志布志市自主文化事業

伝統俳句への挑戦状

◆俳句への目覚め

一九二八（昭和3）年四月、七高を卒業した左右は、二十歳で京都帝国大学医学部に入学。この年の秋、級友の野平藤雄（俳号・椎霞）と共に京大三高俳句会に入会、鈴鹿野風呂に師事し、俳句の世界への第一歩を踏み出した。三高俳句会では平畑静塔、長谷川素逝、井上白文地らとの知遇を得、「京鹿子」「ホトトギス」「馬酔木」などの俳句雑誌に投句を始める。

そして、俳句を始めてわずか二年、一九三〇（昭和5）年六月に「ホトトギス」雑誌欄の巻頭を飾り、一躍新進俳人として注目を集める。既往の手法に捕われない自由でのびのびとした句風は当初から彼の特徴であったが、この頃からすでに、単なる花鳥諷詠に疑問を抱き、口語俳句、無季俳句を取り入れた独自の作風への探求が始まっていた。

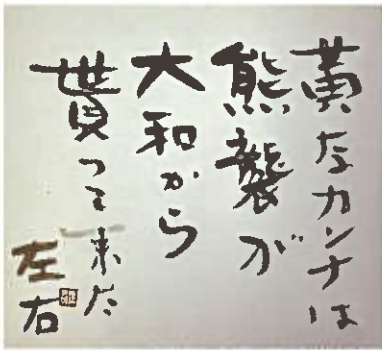
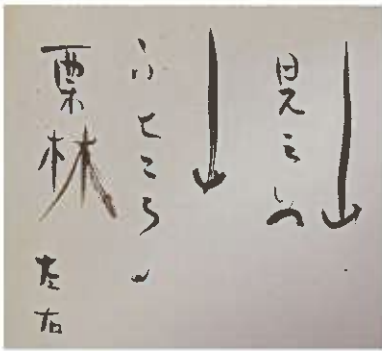
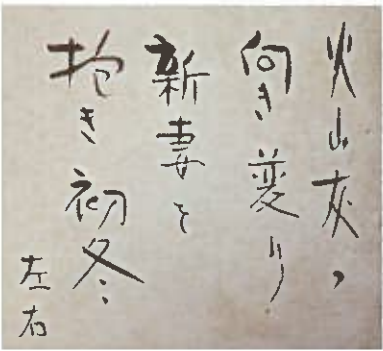
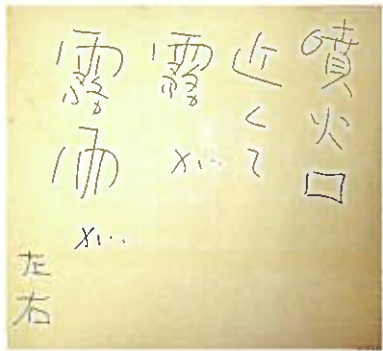
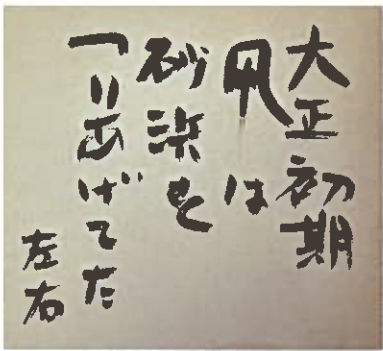
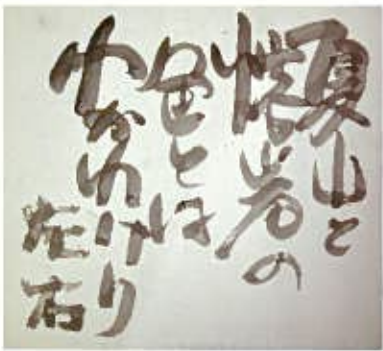
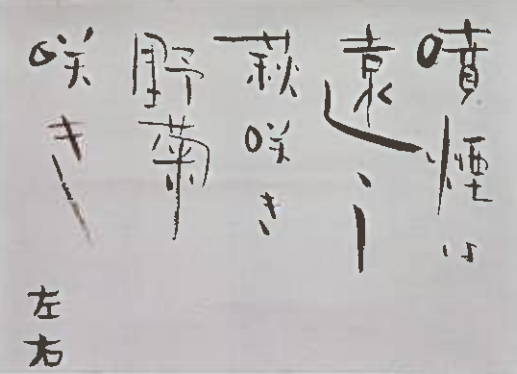
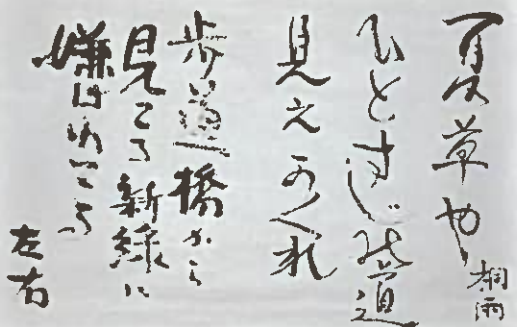
時を同じくして、一九三二（昭和6）年十月、水原秋櫻子が「自然の真」と「文藝上の真」を「馬酔木」に発表して「ホトトギス」から離脱、新興俳句運動の口火を切った。一方、一九三二（昭和7）年七月に京都帝国大学を卒業した左右は、松尾内科を経て京都市立病院に勤務しながら果敢に新しい手法を取り入れた秀句を生み出している。

◆「京大俳句」創刊

一九三三（昭和8）年二月、左右は、平畑静塔、長谷川素逝、井上白文地、中村三山らと、所属結社の自由、作風の自由、批判の自由など「俳壇自由主義」を掲げた俳句雑誌「京大俳句」を創刊させる。左右は編集に携わりながら、大いに型破りな作品や俳論を発表した。しかし一方では、「ホトトギス」への投句も続けていた。

やがて、「京大俳句」は「ホトトギス」系の伝統俳句とは袂を分かち、新興俳句運動の一大拠点となり、理論的、実践的両面において新しい俳句の確立を目指すことになる。そして、一九三七（昭和12）年の盧溝橋事件を契機に勃発した日中戦争以降は、いわゆる戦争俳句が誌面を大きく占めるようになる。

しかし、この頃、左右は、京都市立病院で伝染病研究に没頭していた。新興俳句への熱い情熱をたぎらせる「京大俳句」とは裏腹に、次第に俳句から遠ざかっていくのであった。



戦争体験と俳句

一九四三（昭和18）年十一月、左右は西部十六部隊に臨時召集され、小スンダ列島のスンバウ島で軍医見習士官として第四十六師団野戦病院に配属される。武器を取って敵と対峙する機会はほとんどなく、至つてのんびりとした日々であったという。

しかし、戦況は悪化の一途を辿り、左右らはスンバウ島を後にし、ジョホールバルへ集結。そして一九四五（昭和20）年八月十五日、ついに終戦の時を迎える。左右らは直ちに武装解除され、捕虜として、レンパン島へ送られる。英軍の厳重な監視の下、ひたすら祖国への帰還を熱望しつつ、自給自足、屈辱の抑留生活に入り、焦燥と過激な労働に明け暮れる日々が始まった。やがて食糧不足からくる栄養失調、マラリア、ノイローゼ患者らが続出し、左右はその診察に当たった。

そんな過酷な抑留生活の中で、兵士たちに安らぎと希望を与えたのが、一九四六（昭和21）年四月十六日を皮切りに始まった左右を師としての俳句講座であった。紙不足のため、句会用の紙は、英軍から支給されるレーション（携帯口糧）のクッキーやチョコレットの包み紙を代用したという。句会では皆が望郷の念をこめて言葉紡いだ。それは左右とて例外ではなかった。日本では決して戦争俳句を作らうとせず、俳句への情熱も薄れかけていた左右だったが、ここでは生きる糧として、郷愁の想いを俳句に託したのであった。

一九四六（昭和21）年五月十六日、左右は曲腿化膿症により入院、病院船で内地帰還を果たす。そして、広島県大竹港を経て、五月二十一日、ようやく故郷・鹿児島を踏むのであった。

11月24日(土)～12月9日(日)

午前10時～午後6時 入場無料

志布志市文化会館(月曜休館)

～藤後左右の生涯～

鹿児島県志布志市出身の俳人・藤後左右(本名・惣兵衛)が1991年(平成3年)6月11日に亡くなってから20余年が経過しています。

藤後左右は、1908年(明治41年)に鹿児島県曾於郡志布志町(現志布志市)に生まれ、旧制志布志中学校より第七高等学校を経て京都帝国大学医学部に入学、この頃より俳句を志します。

わずか2年後には、高浜虚子の俳誌「ホトトギス」の巻頭を飾り、無名の医学生が、当時の日本を代表する俳人たちをおしのけ、一席に掲載され昭和初期の俳壇で一躍脚光を浴び、東(東大)の(中村)草田男、西(京大)の左右と並び称されました。

その後、「五・七・五」の定型に疑問を持ち始め、大学卒業後は、平畑静塔、井上白文地、中村三山らとともに「京大俳句」を創刊し、俳句の世界に自由で独創的な風を吹き込みますが、やがて医学の道に専念しました。

その後、京都市立病院などで医師として働き、太平洋戦争時は、インドネシアなどで軍医として、野戦病院に勤務しました。

戦後は、郷里志布志に帰り、内科・精神科の医療法人「左右会」の理事長として地域医療に尽くすと共に、町の教育委員長、文化協会長、母校(現志布志高校)の松蔭会長等の公職を歴任しました。

また晩年は、志布志公害反対運動のリーダーとして、生まれ育った志布志の海と松原を愛し、自然を守るための活動を展開しました。

公害反対運動に「藤後惣兵衛」として熱心に取り組む一方で、「俳人藤後左右」は片時も句作を忘れず、「五・七・五」や「有季定型」にこだわらない自由な口語の「自分らしい俳句」の世界を作り上げていきました。

本展では、俳人・藤後左右の生涯を振り返りながら、左右俳句の魅力と趣味として収集した古美術品などを紹介いたします。

新樹
並いなきい
守真
播りまふ
左石



主催：志布志市 志布志市教育委員会

後援：志布志市文化協会連絡協議会 鹿児島県現代俳句協会

鹿児島県詩人協会 南日本新聞社

協力：志布志左右句会 天街 俳句会 医療法人 左右会

社会福祉法人 橋友会 かごしま近代文学館

FM志布志 BTVケーブルテレビ(株)

問い合わせ：志布志市教育委員会生涯学習課 099-472-1111



2012年(平成24年)11月25日 日曜日

南日本新聞

地元・志布志で「藤後左右展」

開発前の志布志灣の写真や藤後左右自筆の書に見入る来場者

24日、志布志市文化会館



志布志市出身の俳人藤後左右(本名は惣

兵衛、1908〜91年)の企画展「ふるさとを愛した俳人 藤後左右展」が24日、同市文化会館で始まった。トークショーもあり150人余が詰めかけた。鹿児島市のかごしま近代文学館で開催された没後20年記念特別展

を受け、市民らが「地元でぜひ開催を」と要望。会場には地元の関係者が保存していた書類や趣味の骨董類、志布志灣開発関連の写真など約70点が並ぶ。戦前「ホトトギス」巻頭を飾ったデビューから、戦後帰郷して医院を開業。句誌「天街」を創刊。新興俳句の旗手となりながら、晩年は開発反対運動の先頭に立った一生をたどる。

トークショー「藤後左右を語る」は県現代俳句協会の高岡修会長、「天街」の野間口千賀代表、「左右俳句会」の藤後むつ子代表らが登壇。「志布志と

俳句を愛した。その姿がひきつけてやまない魅力」と訴えた。代表的な連作「千鳥君」「裁判長の朗読もあった。会場を訪れた大崎町の大和てるみさん(86)は「左右先生のおかげで今の志布志灣が残った。地元開催してもらってうれしい」。

同展は12月9日まで(月曜休館)。入場無料。同館1099(172)3050。

(桑畑正樹)

藤後左右俳句作品 「藤後左右全句集」より

千鳥夫婦それは運命か愛情か

独身の千鳥に聞きたいことがある

あの夫婦など睦じそうだがね千鳥君

独り身はうらやましいがあわれだよ千鳥君

淋しいこともたまにはあるだろうに千鳥君

女には絶望したのかね千鳥君

雨が降るのも男のせいとされるからね千鳥君

会う度に好きだと言わせるからね千鳥君

急ぎすぎたとあとでおこるからね千鳥君

あの時はああ言ったのにと泣くからね千鳥君

何を見ていたかと聞くからね千鳥君

私を見ていなさいとにらむからね千鳥君

胸を剖けて検べて見たいと言うからね千鳥君

小鳥のように囀るのはいいがね千鳥君

月に十日は放つといて貰いたいね千鳥君

もとの身体にして戻せだからね千鳥君

子供を産みたいと言うからね千鳥君

浮気しそうな素振りもみせるからね千鳥君

よるめきそうではらはらさせるからね千鳥君

わかれて慾しいと或る時は言うからね千鳥君

君の奥さんは死んだのかい千鳥君

入院してもう三年になるのか千鳥君

あとを貰うわけにもいかなね千鳥君

波とくらす他はないのかよ千鳥君

若い娘を見つけたら良いのに千鳥君

好きな娘もあるのだろうに千鳥君

世間態なんかどうでもいいよ千鳥君

好きな娘はほんとにいないのか千鳥君

若い娘には係累があるからね千鳥君

やはりそんなわけにはいかなね千鳥君

女嫌いが無難だろうね千鳥君

千鳥千鳥現代の娘さんは嫌いかい

そんなに昔の人は良かったかね千鳥君

今の娘さんも良いじゃないか千鳥君

男の子にはがっかりするのがあるがね千鳥君

さつきの貝殻拾いは母娘だったのかね千鳥君

遅れだつて帰つて行つたよ千鳥君

貝細工にする貝殻拾いだつてね千鳥君

貝殻拾いで喰べてゆけるのかね千鳥君

貝掘りの老人には逃げないね千鳥君

今でも年寄りだけは好きだつて千鳥君

御老人半分は貝を見落としていたよ千鳥君

紅い汽車が来たよどうだい千鳥君

気が散つて面白くないつて千鳥君

煙を吐く黒いのが良いのか千鳥君

いくら走つても波に濡れないねえらいよ千鳥君

人間は女の波をどうしてもかぶるがね千鳥君

女の浪はかぶるだけではすまないよ千鳥君

千鳥よ走れ俳句も作れ楽しく作れ

千鳥よ走れ歯を食いしばつてでも走れ

悪戦苦斗全く楽しくないよ千鳥

それに句を作つたあとが眠れないよ千鳥

こんな馬鹿馬鹿しい事があるか千鳥

女と遊んだ方が余つ程まじだよ千鳥

好きでやるんだ仕様がないうね千鳥

君が走るのと一緒だよ千鳥

句の下手な奴は長生きするのかね千鳥

千鳥君歩こう苦しんでまで作ることはない

苦しかつたら止まれ千鳥俺もやめる

千鳥君やめる俳句で飯は食えないよ

だが千鳥虚子と芭蕉は俳句で喰べた

俳句じゃないボヤキだつてそうか千鳥

(千鳥相手に 昭和四〇・二・二三)

コスモスよそんなに伸びたら首が折れる

コスモスには女の慾望ぐらい葉が生えてる

コスモスの葉指がほしくなつて岐れたのね

コスモスの男をつかまえる細い葉っぱ

女体らしく束になつて倒れるコスモス

コスモスがあれよあれよと云うのでスタンド消す

コスモスにそれ以上の罪はないだろう

コスモスの白く見える日が配りかねる

コスモスのひどく赤い朝はそわそわする

今日も雨降りコスモスの気が知れない

コスモスは口をばくばくして声を出さぬ

コスモスの前をうろつく僕雄どり

コスモスを見ると押し分けて行きたくなる

コスモスに嫌われビニール栽培のぞく

コスモスが歩けたら挨拶に来るだろう

研ナオコの直立不動の いつもの冬

ずっこけて又すぐ起きて ナオコと冬

失恋の歌を唄いすぎる 冬のナオコ

客席に馬の値を効くナオコは冬

マイク手にひとりぼっちの ナオコに冬

声をころしおのれをころし 冬のナオコ

鎖骨が出て来たかと唄ってる ナオコの冬

男がなんだ いらぬと唄う ナオコも冬

どうしてまた志布志に来たのかナオコと冬

志布志の金 吸いあげていった 冬のナオコ

環境会議場横の鉄柵に腰かけミナマータ

会場の国立劇場を見上げてるミナマータ

クララ和田夫人が手をひいて歩くミナマータ

環境会議場前の舗道を横切るミナマータ

会場前の歩道に座ってしまったミナマータ

エルムの木をつかまえて立ってるミナマータ

エルムの木に母と娘相寄ってミナマータ

会議場前で自分のパンフレットを配るミナマータ

警官がバリケードしてはいれないミナマータ

ゴートン記者が入場交渉に行くミナマータ

警官がゼッケンを外せというミナマータ

ゼッケンを外してふところにいれたミナマータ

環境会議はナマで見れないミナマータ

環境会議をスクリーンで見るミナマータ

日本代表がスクリーンで喋ったミナマータ

環境会議は別な世界だったミナマータ

薄暗いやな会場出ようよミナマータ

慌てて娘をおしっこに連れていく母ミナマータ

裁判長浜が消えたから貝も消えました

裁判長ナミノコガイと云っておいしい貝でした

裁判長浜と貝をかえして欲しいのです

裁判長浜と千鳥はどうなるのですか

裁判長風あげを埤頭でやるのですか

裁判長風をあげるには浜を走らねば

裁判長なくなつた浜を詠めと云うのですか

裁判長春の浜を走ると倒れるのです

裁判長春の浜は走れば足が凹みます

裁判長春の浜は走っても音がしません

裁判長春の埤頭走ればカタカタ音がします

裁判長ドンド焼きも相撲も浜でした

裁判長コンクリの上で相撲がとれますか

裁判長コンクリの上で十五夜のつなが曳けますか

裁判長浜と子供を返して下さい

三人に落花の庭の道成寺

夏山と熔岩の色とはわかれけり

噴火口近くて霧が霧雨が

曼珠沙華どこそこに咲き畦に咲き

舞ひの手や浪花をどりは前へ出る

滝を見るしまひに巖があがるなり

波のりをしてゐるうちも恋敵

横町をふさいで来るよ外套着て

藤後会長はデモの先頭で涙ぐむこと多し

左右先生がデモの鉢巻し腰を伸ばし

慾深き医師なり海も守るべし

にっぽんは葉っぱがないと寒いんだ

かなしみを むしゃむしゃ食べて夏の医者

百合は下向きカンナは上向き俺右向き

はまえんどうだけには海を守ると云わねば

冬の波も原告に加えたらどうだろうか

俳句にも結婚式にも季はいらない

新樹並びなさい写真撮りますよ

恋煩いだらうか血を吐き胸が痛む